
虫かご 1

辻端耕太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虫かご 1

【コード】

N9312V

【作者名】

辻端耕太郎

【あらすじ】

気がつくと僕は、見知らぬ土地に立ち尽くしていた。

小学校の頃、友達の子達と一緒に、虫かごの中にムカデやハサミムシやクモやカマキリなんかを入れて、戦わせて遊んだことが合った。あの時僕は、ムシ達の命懸けの戦いを見て無邪気に喜んでいたのでと思う。ムシ達にとってはいい迷惑だったに違いない。

いや、それとも、案外ムシ達は、自分らが置かれている状況に思い当たるまでもなく、ただ目の前の敵に立ち向かっていたのかも知れない。つまり、ムシとしては、人間という大きな存在によって無理やり戦わされていることなんかつゆも知らなかったのではないか。まあどっちにしろ、残酷なことをやってたものだと思う。

x x x

気が付くと僕は、見知らぬ場所に立っていた。

はて、さっきまで、高校からの帰り道で、自転車にまたがって、通学路上の2つ目の信号を待っていた筈だったが。

もう一度辺りを見渡すが、やはり見覚えのない土地だ。一面視界の開けた場所で、地面はまあまあ平らに舗装されたコンクリート。前方300メートルほど先には塀が見える。どこかの廃工場みたいな所の敷地だろうか。僕はこの、塀にぐるっと囲まれた四角い敷地の、ちょうど真ん中の辺りに立っていた。

「僕は一体どうしたんだろう」思わず独り言が出る。さっきまで乗っていたはずの自転車は近くに見当たらない。ただ、重い部活の用具が入ったエナメルバッグとバットケースだけは背負ったままだった。

時間の経過もはっきりわからない。だが、日が長い今の季節なら、

この明るさからして、多分もうすぐ夕暮れになるくらいの時間だろう。

僕はこの妙な状況に焦燥感を覚えずにはいられなかった。この感じは5歳くらいの頃にデパートで母親とはぐれた時の感覚を思い出させる。ややもすると叫び出したくなるような感覚だ。

とはいえ、ただパニックしても仕方ないので、とりあえず前方の塀に向かうことにした。

キシキシキシ。

突然、耳障りな音が背後から聞こえて来た。僕はその音がなんなのかわからないうちから、嫌な予感しかしなかったが、振り向いてみると、やはりそれは普通なら在ってはならない嫌なものだった。

触覚だ。

本体が何なのかわからないうちから、その長く伸びたものが、触覚だということだけはわかった。

つまり、ムシなのだ。

別に普通のムシだったら僕にとってそれほど問題ないのだが（僕はゴキブリもクモもその気になれば手づかみできる）、そいつの触覚はどうやら、長さが1メートルくらいありそうだ。そして、本体もそれに比例して、とてつもなく大きいようだった。“ようだった”なんて、曖昧な表現だったのは、僕がそいつを直視する前にカバンを放り出して一目散に走りだしていたからだ。

誰だって、あんなものに背後を取られたらパニックになるだろう。そしてそれは部活でそれなりに心身を鍛えられたつもりの僕にも当てはまった。

僕はパニックのために、真っ白な思考のまま、当てもなく走って逃げ出していた。

ふと我に帰ると、僕は工場の廃倉庫(?)のような建物の、作業台の影に隠れてうずくまっていた。

幸いあのムシは、追って来なかったようだ。動きのノロいムシだったのかもしれないし、視力が弱いムシだったのかもしれない。もしかしたら、逃げる時にカバンを投げ捨てたので、ムシがそちらに気を取られているうちに逃げ伸びることができたのかもしれない。なににせよ、ひとまず無事だった。

だが、再びこの建物を出る気にはなれなかった。

そもそもあのムシは一体なんだったのだろう。地球上にあんな生き物が存在するなんて聞いたことがない。

もしや、宇宙生物だろうか。

だけど、宇宙から飛来した生物がいきなり地球の大气に適應しているとは考え難い。

では生物兵器だろうか？バイオテクノロジーとかで怪物を生み出して、兵器として利用するなんて話は、フィクションの世界にはありふれている話だ。

この時、僕はふと、恐ろしい考えに思い至ってしまった。もしあれが本当に生物兵器なら、僕はあいつの餌食になるために、ここに連れてこられたモルモットなのではないだろうか。

そうだとすれば、状況としては絶望的だ。僕はタランチュラの飼育ケースに放りこまれたバツタということになる。

僕は胸が冷たくなるような感覚に陥り、必死で頭からこの考えを追い出そうとした。

とにかく、なんとかしてあのムシから逃れなければ。

そうだ、携帯電話で助けを呼ぶのはどうだろうか？

僕は制服のポケットからケータイを取り出したが、待ち受け画面をみて落胆した。いや、待ち受け画面自体は僕の大好きな格闘マンガの主人公の画像なので、落胆どころかちよつとテンションが上がったのだが、問題はその画面左上に表示された「圏外」の文字である。倉庫内を移動しながら、何回も発信を試したが、全くもって電波が繋がる気配はなかった。

仕方がない。やはり、家に帰るにはこの建物を出るしかないか。だが、塀の外に出るまでにあのムシが襲って来たらどうしよう。あれを撃退しなければならぬのか？

僕は背負っていたバットをケースから出し、体の前でグリップを絞るようにして持った。

このバットでぶっ叩けばあのムシはどうかになるだろうか。

まあ、何もなによりはましか。気休め程度にバットを装備し、僕は再び、塀に囲まれたコンクリートの広場に出ることにした。

そつと倉庫の扉を開けて、コソドロのように（？）外を覗き、ムシの位置を確認した。

幸いあのムシは、100メートル程離れた所に見えるだけだった。遠目に観察する限り、あのムシはムカデのような多足類に近い形をしているようだ。

黒光りする体はいくつもの節に分かれていて、各節から3、4対の足が生えて、蠢いている。

ああいうムシには毒とかがありそうで嫌だ。

僕は遠巻きにしばらくそいつを観察していた。

その時、不意にムシに動きがあった。なんと、ムシの目の前に突如として、人間が現れたのである。

僕は混乱せざるを得なかった。ムシの目前に瞬間的に現れた人間は、一瞬立ち尽くしたように思われたが、すぐに巨大なムシの脅威

に気が付くと、その化け物に背を向け、一目散に駆け出していった。ちよつどさつきの僕もあんな感じだったのかもしれない。だが、今ムシから逃げている男と僕の時では、一つの大きな違いがあった。それは、ムシは、まっすぐ男を追いかけており今にも男は捕まりそうになっている点であつた。

さて、正義感の強い僕としては、男を助けない訳には行かないようだ。

僕はバットを抱えて、考えるより先にムシに向かって突撃していた。

x x x

男は塀のそばまで追い詰められ、なんとか壁際を抜け出そうとするも、足をもつれさせて、転んでしまった。尻餅をついて大ムカデを見上げる形になった男には、体液を滴らせた鋭い牙が迫る！

キシキシキシキシキシ

不気味な音を立てて迫るムシの頭部を見上げながら、男が万事休すと思つた矢先、目の前に、バットをもつた女子高生が割り込んできた。

「な…！」

思いがけない事態に男が思わず声を上げるのを遮り、そのボーイッシュな少女は言った。

「おじさん！早く立って逃げて！」

男は、おじさんと呼ばれたことが少し気に入らなかったが、言われたとおりに立ち上がり、ひとまず壁際から抜け出した。

大ムカデは不意に現れた少女に一瞬虚を衝かれた様子であったが、今度はもたげた首を少女に向けて振り下ろした。

「あぶない！」

またも思わず声を上げる男を尻目に、少女はその攻撃を寸手の所で避けた。

ひらりと美しいまでのステップでムカデの頭を交わした少女は、そのまま流れるようにバットを中段に構え、横なぎに振りぬいた。

ダキヤ！

若い竹をへし折ったような、水気のある音をたてて、バットは大ムカデのこめかみ(?)のあたり、触覚の付け根の外骨格を砕いた。黄色っぽい液体がしぶきをあげて飛び散る。

これは、勝負あったようだ。

まだ大ムカデの肢体は動いていたが、頭を潰されたからには、じきに大人しくなるであろう。余命数分となった化け物は、もう襲ってこなかった。

「うへーばっちい」

少女はゆっくりとムカデから離れると、ムカデの体液がべっとりついた金属バットを血払いしながら男の方にむかってきた。

その姿を見て、男はなんだかおかしくなり、嘔き出してしまった。

「ああ?! いまなんでわらったの? ばかにしてひどい！」

「いや、違うんだよ、ごめん。制服着た女子高生が謎の液体が滴るバットをひきずっている絵が、とても新鮮で」

「やっぱりばかにしてるじゃん！」

「いや、その、死ぬほどの目にあっただせいでアドレナリンとかが過剰分泌してて、ブプっ、ちよっとテンションがおかしいんだ、ツクク、許してくれ」

男はこみ上げてくる笑いを必死に抑えながら弁明した。

「もう、僕が居なかったら、あなたは今頃あいつの腹の中だったん

ですよ？」

そういつて少女は溜息をついた。

それを聞いて、男はおやと思い、訪ねた。

「僕”、だつて？」

「ああ、昔からの癖なんです。小さい頃、男の子とばかり遊んでたから、一人称が“僕”で定着しちゃつて」

「ははあ、道理で男勝りなわけだ」

「…殴られたいんですか？」

「いやいや、悪気はないんだ」

×××

僕達はひとまず、塀にそつて出口を捜し歩きながら、状況を整理することにした。

「へえ、すると俺は、突然ムカデの目の前に、レポートのように現れたんだね？」

おじさんは興味深げに言った。

「はい。そう見えました」

「ふうむ。俺としても、気が付いたら目の前にあいつの触覚があったという感じだしな。あのムシは君の背後に突然現れたというし、まったく奇妙な話だ」

お互いの話を組み合わせても大した手がかりは見出せず、僕はまた落胆した。しかも、同舟の友が、なんだか頼り甲斐のない、このおじさん（「まだ28歳だからおじさんじゃない！」としきりに反論していたが）だけという状況も、少し気に入らなかつた。

このおじさんはいかにも人のよさそうな顔つきで、灰色の背広を着ていた。聞けば会社員で、仕事帰りの電車に乗ったまでは覚えていたが、気づけば突如としてここに来ていたそうだ。

塀は切れ目なく一周していて、どこからも出られそうになかった。じゃあいったい、僕はどこからここに入って来たというのだろう。

僕はもう一つ奇妙なことに気づいてしまった。携帯電話の時計はもう19時を指しているのに、あたりは一向に暗くならないのだ。ここは、日本時間が適用されないような、遠い土地なのだろうか。それとも、この空間には、昼夜の概念がないのだろうか。昼夜のない空間だって？自分の発想があまりに飛躍しているのに気が付いて、慌てて頭をふつたが、僕はもはや、自分が常識を超えた事態に巻き込まれているのだと理解しざるを得なかった。もはやどんな無茶苦茶も、否定できない状況だ。

×××

どんなに塀を調べても、外に出れそうな場所はなかった。僕は達はひとまずさっきの倉庫に入ることにした。

「ふうむ、へんな建物だな」

おじさんはつぶやいた。

「なにが変なんですか？」

「いやね、なんとなくなんだが、この建物自体、外の様子と比べて、浮いているような気がするんだ」

「そうでしょうか？僕には、かつては人が使っていて、今は見捨てられたというような、普通の廃倉庫にみえますけど」

「そのとおり。この建物は人がつかっていた痕跡のある、自然な廃墟なんだよ。外と違ってね」

「ええ？」

「つまり、外の風景の胡散臭さにくらべて、この建物はまともすぎ

るってことさ。ほら、あの作業台の痛み具合とか、ドア付近の床のキズとか、いかにもな廃墟だろ？」

男の言わんとしていることは僕にもなんとなく分かった。だが、それではまるで。

「まるで、この建物以外は、人の手によってつくられたのではない、とでも言いたげですね」

僕がそういうのを聞いて、男は苦笑し、頭をかいた。

「まあ、そういうことになるかな。言葉にすると非常に突飛な考えだが、的外れではないつもりだよ」

なるほど。僕も直感的には、男のいうコトが正しいように思えた。

「でも、それはつまり、何を意味するんですかね」

「さてね。こういうのを考えるのは頭の柔らかい若者の方が得意なはずだよ」

「……もしかして、おじさんって呼んだことをまだ根に持っているんですか？」

僕は呆れ気味に聞いた。

「べつにー」

なんか、面倒くさい人だな。

しかし、考えてみれば、まだお互いに名乗っていなかったことに気が付き、自己紹介をする段となった。

「僕は七瀬八花。友達はみんなハツカって呼ぶから、そう呼んでかまわないです」

「わかった。ハツカ君だね。俺は黒羽九郎。苗字も名前もクロウだから、覚え易いだろ？」

「へえ。面白い名前ですね。クローさんと呼ぶことにします」

こうして後のお笑いコンビ、『ハツカ君とクローさん』が結成された、ということはもちろんない……。

「それで、ハツカ君。君はこの状況をどう捉える？どんなに突飛でもいいから、思ったことを話してみてくれ」

「そうですね…。まず、クローさんも僕も、自分の意思に関係なく、ここに連れてこられた、ということでしょうね」

「うん。俺もそう思う。」

「それから、僕が最初にあのムシを見たとき、あのムシは僕の背後に、突然現れました」

「えっ、すると…」

「はい。おそらく、あのムシも僕達とおなじように、外から投入されたんでしょう」

「ふうむ。なるほど」

クローさんはあごに手をあて、少し考え込むような仕草をした。

「僕が思いつくのはこんなところですよ。次はクローさんの考えを聞かせてください。」

「ううん。それじゃあ話すけど、馬鹿にするなよ？」

「しませんよ。」

「約束だぞ？」

そういつてクローさんは居住まいをただすと、思い切った様子で、こう口にした。

「俺達は、宇宙人に拉致されたんだ」

「はい？」

「だから、宇宙人に」

「はい？」

「だから、うちゅ」

「はい？」

「だから、」

（以下略）

クローさんはこの後、五分ほど口をきいてくれなかったが、謝りまくったらなんとか許してくれた。

「だからいまどきの若者は嫌いなんだ！馬鹿にしないって約束したのに。」

「すみません。あまりに予想外の言葉が発せられたので、僕の脳が自然と拒絶反応を起こしたみたいで……」

「どんな言い訳かねそれは」

「…それで、宇宙人にさらわれたなんて考えた根拠は？」

「まず、俺や君、それからあのムシの現れ方だ。こんなのは、現代の科学じゃ到底説明できない」

「まあ、そうですね……」

「次にあのムシの存在そのもの。あれはこの星のものじゃない。きっと宇宙生物だ」

「でも、そんな発想がありなら、バイオテクノロジーで生み出された生物兵器つてことにしてもいいのでは？」

「あんな、バットで殴れば死ぬような貧弱さで、兵器として使えると思うかい？」

「自分は殺されそうだったくせに」

「…まあ、それはそうだが、生物兵器に俺達一般人を殺させて何になる？」

「性能実験とか？」

「だったらもつと、まともな環境でデータをとるだろ」
「なるほど」

僕は、引っ掛る点もあったが、一応納得してあげることにした。

「それから、外の塀も広場も、何もかもがおかしい」

「どういうことですか？」

「さっきも言ったとおり、この建物の外は、まともな構造じゃない。」

一時間前と比べて、日の向きが全く変わっていない。あれは本当に、俺達が知っている空なのか？それから、周りを囲っている塀からして変だ」

「どこが変なんです？」

「刑務所じゃあるまいし、なんであんなに高い塀があるんだろうね？遠目にはそんなに高くは見えないが、近づいてみると、到底越えることができないようになってる。おまけに、塀の材質も奇妙だ。硬いようできて、表面には奇妙な弾力がある。あれでは、叩いて砕いたり、削って穴をあけることもできない」

そこまで言って、クローさんは大きな溜息をついた。

「つまり、僕らは到底ここから抜け出せそうにないと？」

「ああ。そうだ。ここはきっと、宇宙人がつくった牢屋に違いない」

「……」

「そして極めつけは、まわりとの脈絡が無い、この倉庫だ」

「でも、ここはもともと、人が使っていたんでしょ？」

「ああ。それをわざわざこんな空間に運び込んだんだろうな」

「ええ？一体何のために？」

話が読めない僕に対し、クローさんは自分の額と瞼の間に手を当て、重々しく言った。

「巣箱だろう。我々のな」

それを聞いて僕は、再び胸の奥がすつと冷たくなる感覚に襲われた。僕は思いがけず、昔コオロギを飼っていたときのコトを思い出していた。周りの男の子達と一緒に、近所の藪や学校の裏庭で捕まえてきたコオロギを飼育ケースに入れ、キュウリやナスなんかをエサとして与えていたのだ。あの頃、僕らはみんな、ケースの中に、コオロギが隠られるような巣箱を必ず設置してやっていた。たいていは、割れて半分になった植木鉢を伏せた形で土に置き、丸屋根の住処をつくっていたものだ。

クローさんは、僕らの居るこの倉庫こそが、用意された巣箱なのだ

という。となると、僕らは、捕らわれたコオロギだというコトになる。それはあまりにも不快な考えだ。だが、僕らを捕らえたのが宇宙人であれ、別の何かであれ、どうやら立場上、僕らは本当に、虫かごの中のムシに過ぎないらしい。

これから僕らの身に何が起こるのか、想像しなくなかったが、一方で僕には、一つの予感があった。

多分、僕らはこれから、いろいろなムシと戦わされるのだろう。おそらく、あの大ムカデは、僕らにとって、ただの初戦相手だったのだ。虫かごの主は、これからもムシを送り込んでくるに違いない。ちよūd昔、僕がカマキリやクモを次々と戦わせたように。きつと、あの頃の僕と同じで、この虫かごの主にも目的はない。だから、僕らはいくらもがいたところで、解放してもらえる保障はないだろう。せいぜい、飼い主に気に入られて大事に飼って貰えるように不毛な努力をするしかない。

しかし、クローさんは、おそらくそれを十分に分かった上で、こんなことを言うのだった。

「なあに、雑魚敵を倒していけば、そのうちラスボスの宇宙人がでてくるさ。そいつを締め上げて、一緒に地球に帰ろうじゃないか」

「なんですかその楽観は。ゲーム脳なんですか？」

僕が思わず頬を緩めてさういうと、彼は、

「いやいや、君のバットにかかれば、プレートだってイチコロだよ」

などと言って、笑うのだった。

UNU

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312v/>

虫かご 1

2011年10月9日15時02分発行